

# わが国の電線製造黎明期のメーカー 藤倉電線所

- 住所  
東京都千代田区神田淡路町1
- 交通アクセス  
地下鉄淡路町駅 200m

## ■藤倉電線所

藤倉電線所は、わが国の電線製造黎明期におけるメーカーとして、電線業界の発展に大きく貢献しました。現・株式会社フジクラのルーツです。

明治18年(1885)、東京・神田区淡路町1丁目1番地(現、千代田区神田淡路町1丁目)において、それまで、根掛け\*や羽織ひもを作っていた藤倉善八が、この技術を生かしての電気機器に使用する絹巻線と綿巻線の製造に乗り出しました。電線メーカーとして参加するスタートでした。

\*根掛け：女性が日本髪の髷(まげ)の根元に結ぶ飾りで、金糸・銀糸・編みひも・宝石類などがあります。

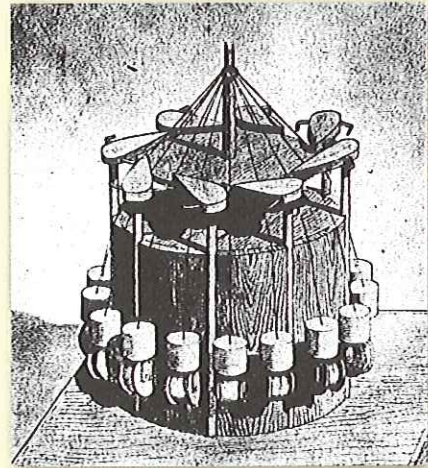


写真1 ひも打ち機械(根掛け工場時代)  
出典 フジクラ100年の歩み(社史)

## ■当時の地図での場所

図1は、藤倉善八が電線製造に乗りだした年の2年前、明治16年(1883)測量、同20年発行の5千分の1地形図です。神田区淡路町1丁目は全域が1番地で、番地から「藤倉電線所」の場所を特定することは不可能でしたが、創業者の藤倉善八伝に挿入されている地図と、当時の風景写真に写っていた加来神社との位置関係をもとに、株式会社フジクラにより特定された赤丸印のところにあります。なお、この地図において地域を特定するものとして「観音坂」が挙げられます。江戸時代には1丁目の全域が大名屋敷でした。

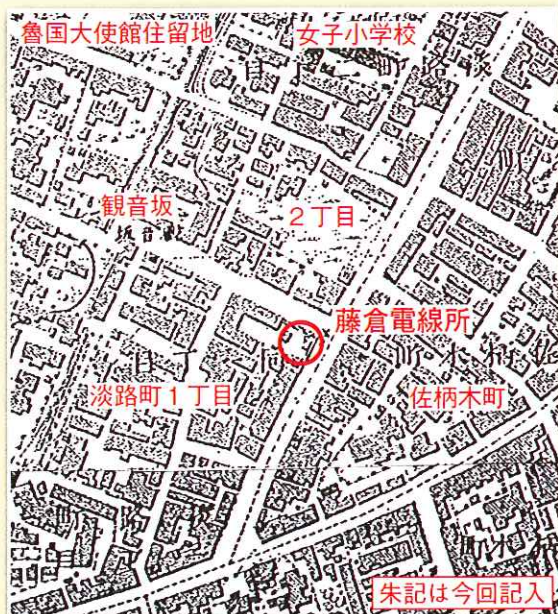


図1 明治16年(1883)測量の地形図  
国土地理院発行地形図を使用

## ■現在の状況

明治時代の地図(図1)を参考に、現在の地図(図2)において神田淡路町1丁目の位置を追うと、西側に南北に走る本郷通りが新設され、また、各道路が拡幅されていますが、観音坂と東側の広い通り(外堀通り)に注目することで、赤丸印のところになります。

現地を訪ねたところ、藤倉電線所のあった場所はガソリンスタンドで、住所は神田淡路町1丁目5番地でした。なお、辺りを調べてみましたが、当時を偲ぶようなものは見当たりませんでした。



図2 現在の地図





写真2 藤倉電線所跡 外堀通りから撮影



写真3 観音坂上からの遠景

### ■藤倉善八と藤倉電線所

藤倉善八（1843～1901）は、天保14年（1843）、下野国安蘇郡船津川村（現・栃木県佐野市）で生まれ、農業のかたわら水車による精米業を営んでいました。明治8年（1875）、水利権が切れたのを機に上京、蒸気機関による精米業などを志しましたが上手くいきませんでした。

明治14年（1881）、神田区淡路町1丁目に転居し、善八の妻いねが隣家の職人の手ほどきを受けて始めた内職の「根掛け」を、仕事として始めました。これから3年後、創意工夫し新発売した丸型の根掛けが大ヒットしました。この新商品の販売には歌舞伎役者の九代市川團十郎を起用し、「市川掛け」と命名し舞台上で宣伝したことが評判になり、全国から注文が殺到しました。この利益が電線事業へ乗り出す資金源になりました。

明治15年（1882）、東京電燈は会社設立と電灯の宣伝のため、銀座でアーク灯を点灯するデモンストレーションを行いました。その翌年の11月にも2回目の点灯を行いました。この時、善八と弟の留吉も見学しており、輝くアーク灯に感動し、この夜の体験をきっかけに電気に興味を抱くようになったようです。その後、わが国電気界のパイオニア・藤岡市助と知り合い、根掛けと電線被覆の編組技術が似ていることを教えられ、電線事業に乗り出したとも伝えられています。

明治18年（1885）、前述のとおり、善八は、根掛けの仕事も続けながら電線事業に乗り出します。従業員は12名、自宅兼作業場は3部屋で、作業場は板敷きの10畳間でした。製品は、明工舎や田中製造所などへ納入しました。

明治20年（1887）、東京電燈会社が架空配電線による一般電燈供給を開始すると、わが国の電線製造は転機を迎えます。同電燈会社は被覆電線を同社と密接な関係にあった三吉電機工場に発注していましたが、同社は電機メーカーで電線製造には限界があったことから、藤倉電線所や横浜電線製造所にも発注がありました。

### ■ゴム被覆線の製造

当時、配電線の引込線にはゴム電線が使われましたが、国産品は性能が悪く、電気事業者は高価な輸入品を買うしかありませんでした。

明治24年（1891）、建築されたばかりの国会議事堂が焼失し、これを契機に「電気営業取締規則」が公布されたこともあり、ゴム被覆電線の開発が一段と急務になりました。

明治26年（1893）、善八や弟の留吉の研究努力が実り、念願のゴム被覆線の開発に成功しました。しかし、これを工業製品化するには更なる技術向上が必要でした。

明治33年（1900）、アメリカに技術習得に行っていた技術者が帰国し、技術面での中心的役割を果たすことで、本格的な生産が可能になりました。

明治37年（1904）、更に技術改良を進め、外国の電線会社9社とともに、わが国唯一最初の逓信省の指定工場に選ばれました。

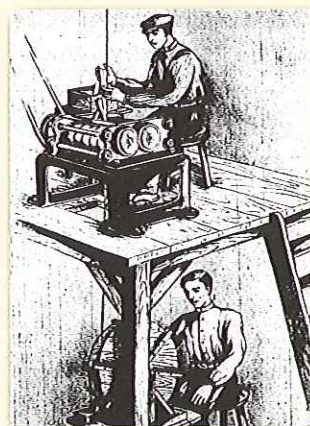


図3 ゴム被覆機械(M26年)  
出典 フジクラ100年の歩み

### ■藤倉電線所のその後

事業は、電気・電話事業拡大に伴う需要もあり順調に拡大しました。明治34年（1901）、創業者の善八は59歳で没し、弟の留吉が後継者になりますが、留吉は「藤倉電線護謨合名会社」を設立し事業を会社組織にしました。

明治43年（1910）、電線事業を分離し「藤倉電線株式会社」を設立しました。平成4年（1992）、社名を「株式会社フジクラ」に改称し、現在に至っています。